

明治年間の「浦島」たち—「小説」と「戯曲」と「児童文学」

早川芳枝（IRCP 客員研究員）

キーワード：浦島太郎、「浦島子伝」、「御伽草子」、草双紙、児童文学、
国定教科書

1 はじめに

いわゆる「浦島太郎」は今日において、子どもに読み聞かせる「昔話」や「お伽話」の1つとして認識されている。しかしながらそもそも『万葉集』や『日本書紀』など日本古代の文献に登場し、その後形態や内容において様々なバリエーションを生みながら各時代において受容されてきた。現存する最古の記録が最初の国史である『日本書紀』に見受けられることから、この浦島子という人物（後の時代においては浦島太郎と呼ばれる人物）が、実在した人物として扱われていた可能性は高い。その後も『水鏡』や『扶桑略記』『古事談』などの歴史書に登場する一方、浦島子を祭る宇良神社では『浦島明神縁起絵巻』として絵巻化され、和歌の題材となり謡曲となって普及していく。さらに木版による印刷技術が発展した江戸初期以降は「お伽物語」や「御伽草子」などと銘打たれた草子に収録されて刊行されるようになる。

古代においては漢文体の古記録に記されていた「浦島の物語」が、和歌を経由することで仮名による物語文学へと取り入れられた。さらに謡曲や狂言、浄瑠璃にも利用されることで広く世に浸透するに至ったといえる。本来は必ずしも子ども向けではなかった浦島が、子ども向けの読み物として定着した最大の要因は1910（明治43）年から使用された第二期国定教科書に採用されたことである。むろんそれ以前から子どもが読むことを想定した書物は存在しているが、日本全国へ広く浸透するという点においては教科書に勝るものはない。

現代において「浦島太郎」として認識される物語はほぼこの国定教科書によっていること、そして国定教科書の編集に携わった巖谷小波の『日本昔噺』シリーズに収録された「浦島太郎」がその原型になっていることはつとに指摘されてきた。殊に三浦佑之氏は『浦島太郎の文学史』（五柳書房1989年）において、古代から近代までどのような経路で「浦島の物語」が普及していったかを子細に検討している。また林晃平氏の『浦島伝説の研究』（おうふう2003年）においては、とりわけ近代における浦島伝説の受容と、巖谷小波によって流布することになった「浦島太郎」やその他のいわゆる昔話の影響、その功罪が分析されている。

明治期後半以降、主に国定教科書を通して「浦島太郎」は子ども向けの読み物として流通していく。ところがその一方で、幸堂得知や幸田露伴が浦島を題材とした作品を執筆し、その後森鷗外、坪内逍遙が相次いで浦島の戯曲を上梓する。近代文学における大家が相次いで「浦島の物語」を題材に作品

を制作しているのである。

本稿では明治以前の浦島について調査しつつ、明治期以降に「浦島の物語」が小説や戯曲、そして児童文学分野でどのように利用されていくのかを考察する。現代においては児童文学という枠組みが自明のものとして存在しているが、子どもが教育を施すべき対象として取り立てて認識されるのは近代以降の発想であり、垣根をはずして見る価値は十分にあるだろう。

記録や説話ではなく、まとまった物語内容としては本来「浦島子伝」という漢文体の書物として成立した浦島子をめぐる物語が、モチーフの取捨選択を経てどのように変化し受容されたのか。本論ではジャンルの枠を越えて考察したい。

なお浦島子が登場する一連の物語は、ある土地やある一族で語り伝えられてきた伝説が基盤として存在していない可能性が指摘されている。一方で物語と記述してしまうと、仮名文で記述されてきた物語文学を想起させるが、この「浦島の物語」は漢文体で記述された作品であり、三浦佑之氏は伊預部馬養による創作の可能性があると主張している¹。このような経緯を鑑みて、本論では古代から中世にかけての浦島子が登場する話を「浦島伝説」という用語を用いず「浦島の物語」と表記することとする。

2 「浦島物語」の成立

先に述べたように、『日本書紀』をはじめいくつかの歴史書や古記録などに浦島に対する言及が見受けられる。『日本書紀』は成立年が判明している中では最古の文献であるが、『日本書紀』成立以前に浦島子に関する書物が存在していた可能性は高い。雄略紀 22 年秋 7 月の条には「語は別巻に在り」と、浦島子についての詳細が別の巻で語られているという但し書きがある。これが『日本書紀』中の別の巻を指すのか、全く別の書物を指すのかには議論があるが、本稿ではこの問題に踏み込まない。

『日本書紀』に記された記録は物語の概略のみではあるが、後の時代に記される「浦島の物語」の枠組みが簡潔にまとめられている。

秋七月に、丹波国余社群筒川の人水江浦島子、舟に乗りて釣し、遂に大亀を得たり。便ち女に化為る。是に浦島子、感でて孀にし、相遂ひて海に入り、蓬莱山に到り、仙衆に歴り観る。²

船で海に出て釣りをしていた際に大きな亀を釣り上げたら、その亀が女となったので契りを交わしてともに蓬莱山へ向かい仙人たちを見た。蓬莱山からの帰還について述べられてはいないが、それはこの時代から何年も後のことなので、編年体である『日本書紀』ではここに記さなかっただけであろう。帰還についてのいきさつはないが、この概略はこれ以降の時代に記される「浦島の物語」とおお

1 三浦佑之『浦島太郎の文学史』（五柳書房、1989年）

2 小島憲之他校注・訳『新編日本古典文学全集 3 日本書紀②』（小学館 1996年）、P207より引用。文中に引用した『日本書紀』の本文はすべて同書による。

むね一致している。

興味深いのは『日本書紀』が編纂された時代において、すでに浦島子は蓬莱山から帰ってきていることがこの記述から窺えることである。なぜなら、本人が帰ってきているという前提がなければ、物語は記されないはずだからである。本人が帰還し、自らの身に起きたことと蓬莱での出来事を語らなければ（語ったという前提がなければ）、物語は結末を迎えず完成しない。

書物としての成立は720年に完成した『日本書紀』よりも後ではあるが、『万葉集』巻9の1740番歌に高橋虫麻呂による浦島子を詠んだ歌が収録されている。この長歌には帰還した浦島子が玉手箱開封後に急速に老化して亡くなる描写があり、虫麻呂の時代には「浦島の物語」が成立していて、現在最もよく知られている老化の後に死亡する結末も存在していたことがわかる。虫麻呂は万葉集巻6に天平4(732)年に詠んだ歌が収録されており³、『日本書紀』の成立時期と歌人としての活動時期が重なっている。

浦島子が向かう先は蓬莱山ではなく「常世」となっていて、仙女は「わたつみの神の女」と表現されており、言葉の選び方は和歌と『古事記』的な古代物語の世界を背景とした長歌に見える。「浦島の物語」が海幸山幸物語と共通する海底世界訪問譚の1つであり、一見すると日本土着の伝承されてきた伝説が背景にある物語だと認識できてしまう。だがこの長歌については『遊仙窟』などの神仏思想の影響が指摘されてきており、慎重な判断が求められる。

同時代には『釈日本紀』所引の『丹後国風土記』逸文にも「浦島の物語」が記録されている。この『丹後国風土記』が和銅6(713)年の官命を受けて書かれたものであるなら、遅くとも8世紀には成立していたと推定され、『日本書紀』が編纂される頃には蓬莱への渡航とそこからの帰還までを語った物語内容が固まっていたことは間違いないだろう。さらにここに記録された「浦島の物語」の冒頭には、「こは旧宰、伊預部の馬養の連の記せるに相乖くことなし。故、所由の旨を略陳べむとす」⁴という一文があり、風土記が編纂された時点ですでに伊預部馬養による「浦島の物語」が存在していたことを主張しているのである。むろん逸文という性格上、これが間違いなく8世紀に編纂された風土記の内容とは言い切れない。しかしながら逸文が記録される以前の段階で、伊預部馬養による「浦島の物語」の存在が、現物はともかく知識として伝わっていた可能性までは否定できない。

『日本書紀』には浦島子の帰還が記されていないが、『丹後国風土記』逸文には帰還までのおおよその年数が記されている。浦島子の質問に里人が「今に三百余歳を経しに何にそ忽にこを問ふや」と答えていて、浦島子が蓬莱から帰還するまで、現実世界では300年以上が経過している設定になっている。これより前に「旧俗を遺れ仙都に遊び、既に三歳のほどを逕ぬ」とあるので、現実世界の時間経過は仙境の100倍という認識である。

興味深いことに浦島子が蓬莱へ渡ったのは雄略天皇の時代(長谷の朝倉の宮に天の下しろしめしし

3 971 番歌の題詞に「四年壬申、藤原宇合卿のの西海道節度使に遣さえし時に、高橋連虫麿の作れる歌一首并せて短歌」とある。(中西進『万葉集(二)』(講談社1980年)、P45)

4 植垣節也校注・訳『新編日本古典文学全集5 風土記』(小学館1997年)、P474

天皇の御代)とされており、少なくとも浦島子が雄略天皇の時代の人物という認識は早い時期に固まっていたようである。『日本書紀』で浦島子が蓬莱に渡った年は雄略天皇の22年と記録されているが、これを機械的に西暦に直すと478年である。この300年後となると、778年、宝亀9年である。現実の歴史に照らし合わせるなら、称徳天皇崩御後に即位した光仁天皇の時代で、皇后の井上内親王と皇太子他戸親王が幽閉されて死去した3年後にあたる。むろん「三百余歳」はあくまで「浦島の物語」を書き記した人物が、雄略天皇の時代を約300年昔と捉えていたことの証左となりうるだけで、正確な年数を表しているわけではない。『丹後国風土記』の逸文が、風土記編纂の官命を受けて書かれた内容であるなら、遅くとも和銅6(713)年前後に伊預部馬養による「浦島の物語」は成立していたとみるべきだろう。

この雄略天皇の時代に蓬莱へ渡り、300年ほどで帰還したという設定は後代の史書にも引き継がれる。次に浦島子が史書に登場するのは『水鏡』で、鎌倉時代初頭の成立とされる。こちらには天長2(825)年に浦島子が帰ってきたという記述があり、雄略天皇の御代から347年たって帰還したと記述されている。つまり、『水鏡』が記す浦島子帰還の時期は『日本書紀』成立よりも100年以上後のこととされているのである。そして雄略天皇22年(478年)から347年後は確かに天長2(825)年であり、正確な年数表記とともに歴史上に位置づけられている。

このように「浦島の物語」が歴史書の中で歴史的事実として位置づけられる一方で、その物語内容は漢文体の形式で記されて後代へと伝わっていく。10世紀初頭の成立と考えられている『続浦島子伝記』には、神女との肉体的交わり(房中術)や仙薬を飲む(鍊丹術)様が詳細に描写されており、当時日本で知られていた道教的な知識が作品に盛り込まれている。『日本書紀』に蓬莱山という場所や仙衆という言葉が登場していることから、この伝説の成立に道教や神仙思想が深く関わっていたことは動かしようのない事実である。三浦佑之氏はこの『続浦島子伝記』こそが伊預部馬養の「浦島子伝」に後の人が漢詩と注釈を加えて成立した文献で、伊預部馬養の「浦島子伝」の原型に最も近い書と推定している。

本論の目的と紙幅の関係からこの問題への深入りは避けるが、「浦島の物語」は漢籍に由来する神仙思想がその成立に深く関わっていた。故にまとまった物語としては漢文体で記されており、大江匡房の『本朝神仙伝』に収録された「浦島子伝」や、『扶桑略記』『古事談』に見える「浦島子伝」などの古記録や説話などと親和性が高かった。こうした状況が打破されたのは『俊頼髓脳』などの歌論書に「浦島の物語」が取り上げられ、和歌の題材として認識されてからである。室町時代以降は能や狂言の題材として取り入れられて受容される一方で、室町時代物語(お伽物語)に至って「浦島太郎」は仮名書きの物語として流布するようになる。

3 近世期から明治期の「浦島」受容

江戸初期に木版印刷による出版が盛んになっていくにつれて、室町時代物語(お伽物語)が広まる一方、その一編である「浦島太郎」もモチーフが黄表紙の題材として用いられたり、赤本として木版

画とともに受容されたりする機会が増えていった。いわゆる『御伽文庫』に収録された「浦島太郎」も古代の「浦島の物語」とは微妙な差異を見せている。狭義の「御伽草子」は享保年間（1716～1736年）に大阪の渋川清右衛門が刊行した23編の仮名文の短編物語を指すが、おそらく現存しているもの以前にも刊行されていたと推定されるので、正確な出版年は不明である。

この作品では丹後国という地名は明記されるものの、いつの時代の出来事かは言及がない。釣り上げた亀を放してやると、翌日海上で舟に乗った女に出会って女とともに船に乗り、10日間の航海の後に竜宮に着く。女の正体が亀であることは別れ際に明かされる、浦島の竜宮からの帰還は700年後となっているなど、物語として劇的な効果をもたらす細かな変化が見える。さらに結末において年老いた浦島太郎は鶴に身を変じて蓬莱山へ向かい、後に亀とともに夫婦で浦島明神として祭られたとあり、「めでたかりけるためしなり」⁵と結ばれている。単に老いて死亡したのではない、一応「めでたしめでたし」という形で大団円を迎えている。

このように江戸期に入ると「浦島の物語」の枠組みにも変化があり、さらに枠組みやモチーフを利用した様々な作品が創作されていく。例えば近松門左衛門の浄瑠璃『浦島年代記』（元禄13年初演）では、安康天皇の病氣中に円大臣が謀反を起こし、皇太子であった泊瀬皇子（後の雄略天皇）を浦島が助ける歴史活劇が描かれる。この話では浦島がいじめられている亀をお金を払って買い取っており、明治以降の「浦島太郎」によく見られるパターンが既に現れている点で興味深い。また鳥居清重の青本『浦島七世孫』（宝暦8年）では浦島太郎本人は乙姫から不老不死の薬をもらって竜宮に住むこととなり、浦島の子孫（物語のはじめから次郎という息子がいる）たちの活躍を描く。ともに浦島を雄略天皇の御代の人と位置づけており、古来の歴史認識を引き継いだ設定がなされている。

一方で浦島のモチーフを作品中に小道具的に導入しつつも、完全に別の話として創作された作品も大量に出現する。一例を挙げれば、山東京伝の黄表紙『箱入娘面屋人魚』（寛政3年）などは、「浦島太郎」後日談であり、乙姫の腰元と浦島太郎の間に生まれた人魚が漁師の男に釣り上げられて夫婦となる話である。人魚の肉が不老不死の効果を持つという八百比丘尼伝説も踏まえられており、その効果で若返りすぎてしまった夫が浦島太郎と乙姫が持参した玉手箱で元の年齢に戻って大団円を迎える。他にも楚満人の合巻『浦島』（文政11年）は海外貿易で巨万の富を得て、南島に漂着した女性と結ばれる内容になっており、異境へと赴いて妻となる女性を得るという大きな枠組みに共通点がある程度にとどまっている。現代においていまだ翻刻されておらず、内容を詳細に知ることができない多数の作品がある。

このようにタイトル中に「浦島」と銘打ちながらも、「浦島太郎」とはかなりかけ離れた内容の作品があり、多くのバリエーション、多様性を持ちながら「浦島の物語」は受容されてきている。こうした近世文学世界を十二分に引き継ぎながら、明治期においても「浦島」の受容と利用は行われていくのである。

5 大島建彦校注・訳『日本古典文学全集 36 御伽草子集』（小学館1974年）、P424

明治維新後も木版印刷による出版はしばらく続くが、明治 20 年代を境に印刷技術の近代化に伴い活版印刷による出版へと切り替わっていく。明治 13 (1880) 年には赤本の体裁そのままに、歌川国政著・竹内栄久画『お伽噺浦島物かたり』(宮田幸助) が刊行されている。しかし明治 22 (1889) 年には野村銀治郎編『田村将軍一代記・小野篁一代記・浦島太郎一代記』(銀花堂) が活版印刷で出版されており、だいたい 20 年代が木版から活版印刷への移行期となっている。

そしてちょうどその過渡期に江戸の草双紙の名残を残す木版本の形で世に出た「浦島」が幸堂得知『浦島次郎蓬莱噺』(春陽堂 1891 年) である。この作品が後に『国会』に連載される幸田露伴『新浦島』に大きな影響を与えていることは、林晃平氏による研究があり、明治においても江戸の草双紙的要素を多分に残している作品と位置づけられている。林氏も指摘されているが、この作品には御伽文庫版の「浦島太郎」がそっくり引用されている。しかし主人公の次郎作は浦島明神に許されて浦島と名乗ることになっただけで、浦島太郎とは血縁のない赤の他人である。浦島明神へ蓬莱への案内を祈願するものの、身を慎んで働いた稼ぎで行くようにと告げられ、獵師から飴売りへ転じる。波乱の末に結末では成功を収めるが、異境としての蓬莱へと赴くわけではない。

この幸堂得知の作品より 4 年後(実質的にはほぼ 3 年後)に、幸田露伴「新浦島」が『国会』で連載開始となる。1895 (明治 28) 年 1 月 3 日号から 30 日号まで 22 回の連載である。浦島太郎の弟の血筋を引く家系として、代々家を継ぐ男は浦島次郎と名乗ってきて現在の当主は 99 代目。その息子である次郎は都に上り学問を修めるが、結局故郷に帰り 100 代目として家を継ぐこととなる。

幸堂得知の作品と同様主人公は「次郎」であるが、其三(連載第 3 回)で飴売りという言葉が出てきており、得知の作品を意識しつつ書いている可能性は高い。しかしながら「浦島太郎の弟」という設定は既に『宇治拾遺物語』の巻 12 第 22 話に見える。陽成院が退位した後に住んだ御所に物の怪が出て、「我はこれ、昔住みし主なり。浦島が子の弟なり。古よりこの所に住みて千二百余年になるなり」⁶と名乗り、社を作って祭るように要求してきた。この物の怪は、自分の一存では決められぬと言った男を一口で食べてしまう。『宇治拾遺物語』の成立当時、浦島子の弟と言って警備の男が理解するほど浦島子の物語が普及していることがわかる場面でもある。

後に道教について本格的な研究を残すほどだから、露伴は当然「浦島の物語」が道教の影響下に成立していることを熟知していたはずである。『新浦島』中にも道教に関する文献が列挙されており、すでにこの当時の時点で道教関連文献を読み込んでいたことをうかがい知ることができる。しかしながら『新浦島』の次郎は蓬莱山も仙境も目指さなければ、仙人になることも選ばない。父の次郎が浦島の家の子を息子の次郎に譲った直後、両親は死に、その遺体は一粒の捨離を残して消え去り仙境へと去った。息子の次郎も嫁を迎えて息子を儲け、身代を譲れば仙人になることは確定している。それが代々浦島の家では繰り返されてきた。

この『新浦島』における息子次郎のあり方を「語り部として父達のように伝説の中を生きることが

6 小林保治・増古和子校・注訳『新編日本古典文学全集 50 宇治拾遺物語』(小学館 1996 年)、P393

できない」『存在と看破したのは西川貴子氏である。西川氏は明治 20 年代に多く出現した帰郷小説と浦島の物語（異境訪問譚）の共通性を指摘しつつ、『新浦島』の次郎は異境訪問譚が終わったところから自身の物語を生き始める存在と位置づけている。代々家に伝わる「浦島家の物語」を生きることができず、古代から伝わる「浦島子の物語」に生きることができない。すなわち家の伝統通りに仙人になることを断念し、まず魔道を修めようとするところから次郎自身の物語が始まっている。

まず軍荼利明王の修法を会得して聖天（歓喜天）を呼び出すという計画を立てて護摩壇を設置し、修法に望んだ結果、聖天を招くことに成功する。しかし魔力を得て仙人となる魂胆を見透かされ、魔と仏、仙とは何かを理解せずに浅はかな考えで行動に出たことを叱責されてしまう。次郎は自分を眷属に加えて召し抱えてほしいと願い出るのだが、聖天は宝剣で次郎を二つに切り、同須という分身を生み出して次郎に従者としてつける。

ある意味で次郎が分裂し、その一方が聖天の眷属として通力を得た状態といえなくもない。しかし次郎は同須と彼が持つ通力を十全に使いこなすことができないまま、小説は結末を迎える。郭で出会った勇菊という遊女が次郎を追って訪ねてくるが、次郎が彼女を拒否すると、勇菊は海に身を投げてしまう。溺れかけたところを次郎が救い出し、この後どうしたものかと同須に相談すると、同須は通力で勇菊を石に変えてしまう。次郎は勇菊の石化を解くよう命じると、自らの業は自分で引き受けると決意し、自らを石化させて三年間守るように同須に命じる。魔道を完全にものにすることも仙となることもできず、次郎は石化したまま小説は終わる。次郎はどのような物語にも組み込まれず、組み込まれることを拒否し続けているのである。

こうしたあり方は、露伴よりも後に浦島を題材に戯曲を書いた鴎外や逍遙の作品よりもむしろ斬新で小説らしいあり方といえるのではないか。かつて論者は 1900 年代初頭のワーグナーブームと森鴎外の戯曲『玉篋両浦嶋』（歌舞伎発行所、1902 年 12 月）、坪内逍遙が和製オペラを意図して制作した『新曲「浦島」』（早稲田出版部、1904 年 11 月）の関係について論じたことがある。ワーグナーのオペラタンホイザーも浦島太郎も異境訪問譚であり、話の構造に類似点がある。だがワーグナーブームを全体的に捉えたとき、浦島とタンホイザーの類似点だけが浦島を題材とした決定的な理由にはなり得ないだろうと結論づけた。ワーグナーが制作するオペラはゲルマンの古伝承を題材にしており、ワーグナーのオペラのごとき和製オペラ、和製劇を制作するなら、日本における最古の物語を用いたいという意識が働いたのではなかったかと推測している。

さて露伴『新浦島』がある意味で主人公が二人に分裂した訳であるが、鴎外の『玉篋両浦嶋』にも後ノ太郎と呼ばれる登場人物がいる。竜宮から現代に帰還した浦島太郎が玉手箱を開けると、煙ばかりでなく真珠が出てくる。浦島太郎はこれから日露戦争へと出陣する後ノ太郎に軍資金として玉手箱の中身を渡すのである。一方、逍遙の『新曲「浦島」』では玉手箱を開けて年老いてしまった浦島太郎を郎子と郎女の二人が慰め、いつ過去の現実世界に理想境としての常世を築こうと誓う。両作品とも

7 西川貴子「明治の浦島物語 幸田露伴「新浦島」試論」（『同志社国文学』第 78 号、同志社大学国文学会、2013 年 3 月）

に、竜宮から戻り年老いてしまった浦島太郎と、その力や意志を引き継ごうとする若い人間が結末部に現れる。

『浦島年代記』のように帰還した浦島が自分の子孫と出会う物語や、『浦島七世孫』のように子孫たちの動向が話の中心となる物語など、江戸期には浦島本人と後世の人間が登場する物語がいくつか見受けられる。またこの両作品が発表される直前に刊行されている福田琴月編『新編お伽噺第一編 二人浦島』（修文館 1901 年）も影響を与えている可能性は否定できないだろう。この作品には巖谷小波の序がつけられており、そこには「今メルヘンの本場にありて、其道に浮き身をやつせる吾等の、一入嬉しう覚ゆる処に御座候」という一文があり、署名の直前には「伯林にて」とある。巖谷小波は 1900 年から 1902 年までベルリンに赴任しているので、おそらくはその期間中に書かれたに違いない。この『二人浦島』は竜宮に行った浦島太郎を息子の太郎作が追いかけていく内容で、太郎作は父とは異なり、宝物の入った箱を乙姫から受け取っている。二人の「太郎」と玉手箱に宝が入っている点で鷗外の『玉篋両浦嶋』と共通している。

巖谷小波は『玉篋両浦嶋』の上演の際に会場に足を運び、「若し『玉篋両浦嶋』をオペラにして見たならば」（『歌舞伎』1903 年 2 月）という感想を書き残している。「浦島の物語」をモチーフとする作品は先行する様々な作品があり、誰のどの作品がどのように影響を与えているのか一概に断定はできない。だが、明治期に浦島太郎的存在が作中に二人同時に出現する傾向が高いということは言えそうである。親と子、祖先と子孫、年老いた者とその意志を継ぐ者という関係性が多い中で、幸田露伴の『新浦島』は異彩を放っている。姿はそっくりであるが通力を自在に使いこなす同須という存在は、次郎に魔道を修めさせるわけでもなく、仙になるよう導くわけでもなく、ただ次郎の「我は我が自業の悪果を自ら受けて苦しむべきのみ」という言葉に従う。そして次郎を石化させ、石化が解けるまでの 3 年間、次郎の言いつけ通り次郎を見守る。

結末の一文、「次郎は今に化石せしまゝ静に生死の外に在りとぞ」⁸には物語の予定調和を断固として拒否する姿勢が垣間見える。とはいえ、物語は宙づりのまま中断されて終わり、3 年後に石化が解けたときに再び同じ騒動が繰り返される可能性をも含んでいる。そもそも 3 年後に次郎の石化が解けるのか、3 年を待たずに死んでしまうのかも分からない。既存の物語の枠に吸収されることを拒みつつも、その後の可能性を想像させる形で物語は閉じられているのである。

4 終わりに

以上で見てきたように、「浦島の物語」は古代期に成立し、歴史書の中に歴史的事実として位置づけられるという不思議な経緯で伝わってきた。和歌を経由することで受容の幅が広がり、近世期に至って木版印刷が普及すると、『御伽文庫』の「浦島太郎」だけでなく、多様なパロディを生み、様々な形態の作品にモチーフが使われるようになった。こうした「浦島」の多様性は、明治期に小説や演劇、

8 幸田露伴『露伴叢書』（博文館 1902 年）より引用。初出の『国会』掲載時は誤字などが多く、『露伴叢書』収録の際に最終的な手直しが行われているので、こちらの本文を参照した。

オペラなど新しい形の表現方法にも適応して取り入れられる結果となった。

しかし一方で出版の近代化と近代教育が、多様なバリエーションを持った「浦島の物語」を固定化してしまう方向に向かってしまった部分もある。近代化が物語世界の豊かさを奪う結果となった側面も否定はできない。巖谷小波が編纂した『日本昔話彙』の第18に「浦島太郎」が収録されている（博文館1897年）。そしてこの「浦島太郎」の省略版とも言えるのが第二次国定教科書の『尋常小学読本』に掲載されている「浦島太郎」であり、以降国定教科書が廃止になるまで「浦島太郎」は教材として掲載され続ける。林晃平氏は明治初期の赤本を検証して、巖谷小波の「浦島太郎」にはオリジナリティがほぼないことを指摘しつつ、活字メディアを通して昔話を大量に普及させたことが巖谷の功績と述べている。明治期に児童文学という分野を開拓し、その影響力が大きいだけに功罪も大きいとは言えるだろう。

巖谷小波による『日本昔話彙』版の「浦島太郎」も国定教科書も結末は玉手箱を開けた太郎がおじいさんになるところで終わっている。『御伽文庫』版のように鶴になるとか、古代の「浦島の物語」のごとく仙人になって仙境へ去って行ったことが示唆されることもない。これでは亀を助けたのに報われないし、かえってひどい状況になっている。この歳をとって終わりという結末は、同時代の松木平吉『教育昔話（浦島太郎）』（松木平吉1899年）とも共通しており、やや時代が下って徳永寿美子『浦島太郎』（講談社、1937年）でも同様となっている。

とはいえ、本来の意味づけが物語から消え、理不尽かつ残酷に思える結末も悪くはないのかもしれない。この国定教科書で「浦島太郎」を読んで、結末を理不尽に感じたのだろう。太宰治は自身の作品『お伽草紙』で「浦島さん」という作品を書いている。浦島太郎が歳をとってしまったことを「年月は、人間の救ひである。忘却は、人間の救ひである」⁹と捉え、「日本のお伽には、このやうな深い慈悲がある」と述べている。むろんそうではない結末も知っていたとは思いますが、「タチマチ シラガノ オヂイサン」となる結末の「浦島太郎」がなければこの作品は生まれなかつただろう。いずれの結末にしても、もう1つのテキストが思わず生まれてしまうような魅力が「浦島の物語」には存在していると言える。

9 太宰治「浦島さん」（『太宰治全集 8』、筑摩書房1998年）